
講座

昭和の文学（戦前）

藤澤 秀幸

天皇の崩御によって文学が一変するわけではない。昭和文学の起点は、昭和元年ではなく、大正 12 年 9 月 1 日の関東大震災と考えるのが最も妥当である。昭和 12 年 7 月、日中戦争が始まり、日本の文学は変貌する。関東大震災から日中戦争勃発までの文学が、昭和の戦前の文学である。昭和の戦前の文学は、次の三つのグループによって整理できる。一つ目はプロレタリア文学の作家たち、二つ目は新感覚派およびそれから発展した芸術派の作家たち、三つ目は明治あるいは大正に登場した既成作家たちである。

昭和文学はいつ始まるのか。改元、すなわち天皇の崩御によって文学が一変するわけではない。したがって、昭和文学は昭和元年から始まるのではない。では、いつを昭和文学の起点とするのか。昭和の新しい文学はプロレタリア文学と新感覚派の文学である。前者は、資本家に搾取される労働者を解放することを目的とした文学で、過酷な労働やストライキの顛末などを描いた。マルクス主義・共産主義・社会主義などの左翼思想の影響を受けており、文学的には表現よりも内容を重視した。後者は、新しい感覚・新しい表現をめざした文学で、内容よりも表現を重視した。内容重視の前者と表現重視の後者は、昭和初年代に激しく対立し、文学論争を起こした。プロレタリア文学の登場は大正 13 年 5 月の雑誌「文芸戦線」の創刊であり、新感覚派の登場は大正 13 年 10 月の雑誌「文芸時代」の創刊である。したがって、昭和文学の起点は、少なくとも大正 13 年までは遡らなければならない。そもそも大正文学の起点は明治 43 年 4 月の雑誌「白樺」の創刊、すなわち武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎らの「白樺派」の登場とするのが最も有力な説であるが、雑誌「白樺」は大正 12 年 8 月の第 160 号で終巻となった。「白樺」廃刊は大正文学の終焉を象徴する文学的事件であるが、それは外的な要因によって第 161 号が刊行できなかったからである。その外的要因とは、大正 12 年 9 月 1 日の関東大震災である。日本の文学の中心は東京であった。その東京が、大震災によって廃墟となり、モダンな都市として復興する。横光利一や川端康成らの新感覚派はその新しい都市空間を舞台にして新しい文学を試みた。横光は新しい銀座を、川端は新しい浅草を小説の舞台として利用した。新感覚派の登場に関東大震災は大いに関係している。また、関東大震災は、個人レベルでも作家に影響を与えた。例えば、有名な例として、谷崎潤一郎を挙げることが出来る。江戸っ子の谷崎は関東大震災のあと、関西に移住する。そして、西洋風の文学から日本風の文学へと転換した。以上のことから、昭和文学の起点を大正 12 年 9 月 1 日の関東大震災と考えるのが最も妥当である。

昭和 12 年 7 月、演習中の日本軍と中国軍が盧溝橋で衝突し、日中戦争が始まった。関東大震災

から日中戦争勃発までの文学が、昭和の戦前の文学である。昭和の戦前の文学は、次の三つのグループによって整理できる。一つ目はプロレタリア文学の作家たち、二つ目は新感覚派およびそれから発展した芸術派の作家たち、三つ目は明治あるいは大正に登場した既成作家たちである。以下、三つのグループに分けて、戦前の文学について述べる。

大正 13 年 5 月、平林初之輔・青野季吉・前田河広一郎・葉山嘉樹らによって「文芸戦線」が創刊され、プロレタリア文学が日本に登場した。14 年 3 月には「治安維持法」が成立し、左翼の活動家への弾圧が強化される。12 月には、「文芸戦線」の作家たちが中心となって「日本プロレタリア文芸連盟」(プロ芸) が結成された。葉山嘉樹の代表作である『セメント樽の中の手紙』(15 年 1 月) と『海に生くる人々』(15 年 10 月) が発表された。昭和 2 年 6 月、「プロ芸」が共産党系と非共産党系に分裂する。青野季吉・葉山嘉樹らの非共産党系は機関誌「文芸戦線」を携えて「プロ芸」を脱退し、「労農芸術家連盟」(労芸) を結成した。共産党系の「プロ芸」の中心は中野重治・蔵原惟人であった。機関誌を失った「プロ芸」は、7 月に機関誌「プロレタリア芸術」を創刊した。9 月、平林たい子が『治療室にて』を発表する。11 月、「プロ芸」がさらに分裂し、脱退した蔵原惟人らが「前衛芸術家同盟」(前芸) を結成し、昭和 3 年 1 月、機関誌「前衛」を創刊した。2 月、初の衆議院普通選挙が行われ、無産政党(合法的社会主義政党) が 8 議席を得た。政府は共産主義・社会主義への警戒を強め、3 月に左翼活動家を全国的に一斉検挙した(三・一五事件)。佐多稲子のデビュー小説『キャラメル工場から』(3 年 2 月) や黒島伝治の軍隊批判の小説『渦巻ける鳥の群』(3 年 2 月) が発表された。3 月、共産党系のプロ芸と前芸が合体し、「全日本無産者芸術連盟」(ナップ) が結成され、5 月には機関誌「戦旗」が創刊された。プロレタリア文学は、その内部において、非共産党系の「労芸」(文戦派) と共産党系の「ナップ」(戦旗派) が対立する構造を呈することになる。7 月、政府は思想犯に特化した特別高等警察(特高)を設置し、特高による思想犯への拷問が許された。12 月、「全日本無産者芸術連盟」(ナップ) は「全日本無産者芸術団体協議会」(略称は同じく「ナップ」) に再組織化され、4 年 2 月、ナップの文学部門として「日本プロレタリア作家同盟」(ナルプ) が結成された。4 月、再び左翼活動家を一斉検挙した四・一六事件が起きたが、プロレタリア文学の名作である小林多喜二の『蟹工船』(5 月～6 月) や徳永直『太陽のない街』(6 月～11 月) が発表された。5 年 4 月、ナップは共産主義芸術の確立を運動方針に決定し、9 月に機関誌「ナップ」を創刊した。6 年 9 月、日本軍は中国東北部の満州の南満州鉄道(日露戦争によってロシアから日本に譲られた鉄道) を爆破し、それを中国の仕業だとして満州を占領した「満州事変」が起きた。翌 7 年 3 月、日本は「満州国」を建国させ、満州を植民地化するが、諸外国から批判を受け、8 年 3 月、ついに日本は国際連盟から脱退し、国際的に孤立化していく。その間、6 年 11 月に「ナップ」が解散し、「日本プロレタリア文化連盟」(コップ) が結成され、12 月に機関誌「プロレタリア文化」が創刊され、「戦旗」は廃刊となった。7 年 3 月、モスクワのコミンテルン(国際共産党) が日本共産党に、戦争反対の闘争をせよ、天皇制との闘争をせよ、勤労国民の利益を守る闘争をせよという「32 年テーゼ」を発した。同時期に日本プロレタリア文化連盟(コップ) への大弾圧が始まり、蔵原惟人や中野重治が逮捕された。5 月には、日本の右傾化・軍国主義化を示すような、青年将校によるクーデタ未遂事件「五・一五事件」が起き、犬養毅首相が殺害された。8 年 2 月、小林多喜二が逮捕され、特高による拷問のために築地署内で殺害された。6 月、日本共産党の重要な

幹部であった佐野学と鍋山貞親の転向声明が発表され、その後、多くの思想犯が転向することになり、それが「転向文学」を生むことになる。「転向」とは共產主義者や社会主義者がその主義を放棄することであり、転向の経緯や転向後の内面を主眼とする文学が「転向文学」である。高見順の『故旧忘れ得べき』(10年2月～11年9月)や中野重治の『村の家』(10年5月)が「転向文学」の名作である。プロレタリア作家への厳しい弾圧とプロレタリア作家の転向によって、9年2月、「プロレタリア作家同盟」(ナルプ)は自ら解散を宣言するまでに追い込まれ、プロレタリア文学は消滅する。11年2月、青年将校によるクーデタ未遂「二・二六事件」が起き、12年7月、蘆溝橋事件から日中戦争が始まり、時代は「戦中」になる。

大正13年10月、横光利一・川端康成・片岡鉄兵・今東光・中河与一らによって「文芸時代」が創刊された。新感覚派の登場である。創刊号に掲載された横光利一の『頭ならびに腹』(13年10月)は、その斬新な表現とは裏腹に内容が二の次という新感覚派の特徴をよく示している。横光は『春は馬車に乗って』(15年8月)を、川端康成は『伊豆の踊子』(15年1月～2月)を発表した。昭和2年12月、浅草・上野間に日本初の地下鉄が開通し、震災で壊滅した浅草はモダンな歓楽街として復活して栄える。その活気に満ちた浅草を舞台とする小説が川端康成の『浅草紅団』(昭和4年12月～5年2月)であった。3年11月、横光利一は『上海』(～6年11月)の連載を開始した。『上海』は横光が提唱した「純粋小説」の具体的な実作であった。新感覚派の中心的な作家であった横光と川端は、非プロレタリア文学の新人作家たちの求心的な存在になった。昭和4年4月、中村武羅夫・龍胆寺雄・川端康成・吉行エイスケらによって雑誌「近代生活」が創刊され、10月には横光利一・川端康成・堀辰雄・永井龍男らによって雑誌「文学」が創刊された。「近代生活」のメンバーは「十三人倶楽部」と自らを称し、5年3月には中村武羅夫・龍胆寺雄・川端康成・舟橋聖一・今日出海・阿部知二・井伏鱒二・中村正常・吉行エイスケら三十二人の「新興芸術派倶楽部」へと発展する。さらに非プロレタリア文学の新人作家を取り込んで、文壇における勢力を増し、「新興」という言葉が取れて「芸術派」と呼ばれるようになった。作品発表の場を広げるために、5年5月には横光利一・川端康成・堀辰雄・永井龍男・井伏鱒二・小林秀雄らによって雑誌「作品」が創刊され、さらに8年10月には宇野浩二・川端康成・小林秀雄・武田麟太郎・林房雄・広津和郎・深田久弥らによって雑誌「文学界」が創刊された。後者はのちに横光利一・阿部知二・舟橋聖一・島木健作らも同人に参加した。7年4月、伊藤整の『新心理主義文学』が出版された。「新心理主義文学」とは、ジェイムズ・ジョイス、マルセル・ブルースト、ヴァージニア・ウルフ、ヘンリー・ジェイムズらの20世紀の新しい欧米の文学である「意識の流れ」の文学のことである。伊藤整は「意識の流れ」の文学の日本文学への移入をめざし、多くの評論を執筆した。それをまとめた評論集が『新心理主義文学』である。芸術派の作家に影響を与え、横光利一は『機械』(5年9月)、川端康成は『水晶幻想』(9年4月)、堀辰雄は『風立ちぬ』(11年12月～13年3月)を書いた。その他の「芸術派」の代表作として、井伏鱒二の『山椒魚』(4年5月)、牧野信一『ゼーロン』(6年10月)、丹羽文雄の『鮎』(7年4月)、石坂洋次郎の『若い人』(8年5月～12年12月)、宇野千代の『色ざんげ』(8年9月)、尾崎一雄の『暢気眼鏡』(8年12月)、北條民雄の『いのちの初夜』(和11年2月)、石川淳の『普賢』(11年6月～9月)がある。10年1月、川端康成は『夕景色の鏡』という短篇小説を発表した。約13年の月日を費やした彼の代表作『雪国』(10年1月～22年10月)の冒頭部分である。そして、横

光利一は、12 年 4 月、約 9 年の月日を費やしても未完だった彼の代表作『旅愁』(～21 年 4 月)の発表を開始した。芥川賞と直木賞が創設され、第一回芥川賞には石川達三の『蒼氓』(10 年 4 月)が、第一回直木賞には川口松太郎の『鶴八鶴次郎』(9 年 10 月)が受賞した。

明治・大正の既成作家では、谷崎潤一郎が『痴人の愛』(13 年 3 月～14 年 7 月)と『春琴抄』(8 年 6 月)を、島崎藤村が『夜明け前・第一部』(4 年 4 月～6 年 10 月)と『夜明け前・第二部』(7 年 4 月～10 年 10 月)を、永井荷風が『溼東綺譚』(12 年 4 月～6 月)を発表した。志賀直哉は『暗夜行路』(大正 10 年 1 月～昭和 12 年 4 月)の最終章を 12 年 4 月に発表した。大正文学の旗手ともいうべき芥川龍之介は、昭和 2 年 7 月、自ら命を絶った。大正文学の終焉を告げるような象徴的な出来事であった。遺作の『歯車』(昭和 2 年 10 月)や『或阿呆の一生』(昭和 2 年 10 月)が芥川の死後に発表された。